

雲南南部山地の少数民族の村々を訪ねて

神山 巍

雲南懇話会^{注1)}

2008年11月2日から11月15日まで2週間、中国雲南省中央南部地域（省都昆明市の南、紅河自治州・文山自治州とその周辺）の山地に棲む少数民族の村々を訪問する機会があった。雲南省大理から雲南省河口を経てベトナムのハノイへ流れる紅河（ホンホー・中国名：元江）とその支流のほとり、紅河に沿って連なる哀牢山地（AILAO MOUNTAINS）の山の傾斜地、平坦地、盆地や谷間に棲み分けて平和に暮らす少数民族の村々を訪ね、その生態を観察する機会を得た。訪ねた少数民族それぞれの生態から伺うことのできた独自の文化創造、自然環境との調和、環境問題への対応について若干の考察を行った。一方、近年の世界的なグローバリゼーション（市場経済化）の流れの中でそれに抗する形で制定されたユネスコ（UNESCO: 国連教育科学文化機関）の文化多様性条約（2005年制定）による少数民族の多様な文化の保全と創造的発展の促進に関して、合わせて報告する。

はじめに

1) 今回の訪問の目的及び実施体制は以下の通りである。

(1) 雲南少数民族の村4～5箇所を訪問、生活文化（照葉樹林文化）の実態の一端を観察する。各少数民族がその生活環境と文化を守り育て、かつ伝承していく課題と方策を検討する第1歩とする。

(2) 雲南大学民族研究院の以下のスタッフに全行程を同行してもらい、多方面に亘りご指導をいただく。

雲南大学民族研究院 尹紹亭 教授
雲南大学民族研究院 張海 博士研究生（英語通訳、記録）

雲南大学民族研究院 曹津永 修士研究生（英語通訳、兼中国側 Coordinator）

雲南師範大学外語学院 宋旭艷 学部4年生（女性の日本語通訳）

（元）雲南省文山州丘北県旅游局長 羅樹昆（苗族、彝族、壮族の村の案内役として同行）

2) 訪問した少数民族の村々

①玉溪市新平県腰街鎮南碱村（文化生態村^{注2)}・花腰タイ族の村

②新平県から紅河州個旧市を経て、山上（標高約2000m）の卡房鎮・苗（ミャオ）族の村

③紅河州元陽県梯田鎮・哈尼（ハニ）族の村2箇所

④文山州丘北県仙人洞村（文化生態村）と同州同県白臉村・彝（イ）族の村

⑤文山州丘北県屏屏鎮碧松村・壮（チワン）族の村

3) 雲南地域は中国の他地域に対し大きな特色を持っている。

①水量豊富な川や湖が幾つもある。西からミャンマーでサルウィン川となる怒江（ヌジャン）、ラオス、タイでメコン川となる瀾滄江（ランツァンジャン）、下流で長江となる金沙江（チンサジャン）、そして、南東に流れる紅河がある。それらの支流は山間を縫って無数にある。巨大な山岳の山間やカルスト地形の中に、大小の湖が幾つもある。今回、訪問した地域はそのうちの紅河に沿った地域であった。その山河、谷間、盆地、平野に稲作や雑穀、サトウキビ、トウモロコシを栽培する農業が展開されていた。

②気候が亜熱帯的で雨期（4月～10月）がある。南米原産と言われるブーゲンビリアが咲き、バナナが実る。山に多量の雨をもたらす。今回行った哀牢山地の南側斜面は棚田（terraced paddy field）が山の上から下へ下へと（標高2,000m位から）作られ、悠久に変わらない

美しい姿を見せていた。2千年の歴史をもつと中国観光当局のガイドに記されている。

- ③ヒマラヤ山脈から東南アジアへと続く巨大な山稜が幾つも形成されている。西北には、チベット族の人々が聖山と仰ぐ雲南の最高峰、梅里雪山（標高 6,740m）が聳えている。雲南の西から東の雲貴高原まで、標高 6,000m 台から山々が連なる。少数民族がその高低の中に棲み分け、各々、独自の文化を形成している。今回訪問したのはそのうちの哀牢山地。山中に点在する村々の落ち着いた、懐かしさを感じさせる佇まい、サトウキビ、トウモロコシや緑なす様々な蔬菜の畑、盆地に広がる水田、山の緩やかな斜面に作られた焼畑、村の家々の庭や小路を人と同じように歩き回る家禽（鶏、あひる、鶯鳥等）や囲いの中に数頭で飼われる家畜（豚、ヤギ、牛、水牛等）、山地の谷間に扇状に広がる美しい棚田を幾つも見た。各地で振る舞われた料理は多種類の野菜、鶏や豚を主体としたもので、美味と言えるものだった。同時に振る舞われた白酒（パイチュー）はそれぞれ独特の味をしていた。

花腰タイ族の村

- ①11月4日、雲南大学のバスで昆明市を出発し、玉溪市新平県腰街鎮（紅河支流の川ほとり）にある南碱村・花腰タイ族の村（民族文化生態村^{注2)}）に着いた。昆明市の標高は約 1,900m で村の標高は 550m。村の入口で村長、前村長、民族衣装を着た女性達に迎えられた。近くでアヒルが、がーがーと鳴いていた。見慣れぬ人達が来たので、警戒しているような鳴き方だった。女性達の服装は、行事用の盛装で、名の通り華やかな色使いの刺繍を施した腰帯（colorful embroidered girdle, made of silk, tied in the waist）を巻いていた。サッコンと呼ばれる刺繍や銀飾りを施した体にぴったり合ったブラウスを着用し、同じく刺繍を施した筒型の短いスカートををはき、その上に腰帯を巻き、足に脚絆を巻いていた。髪を結い上げて筒状の帽子を被っていた²⁾。先ず、村に入るに当たり、赤い紐で道一杯に四角く囲われた中に 5 人 1 組で横 1 列になっ

て縄跳びのように入り、後ろに 2 回、紐の杵から出て、又、紐の中に入り、それから前（村落の中）へ出た。悪霊を払う儀式との事だった。次に、女性達が赤い紐を手首に巻いてくれた。健康を祈り、厄除けのためとの事だった。それが済むと、小さな竹を輪切りにして作った入れ物に注がれた白酒（パイチュー）を貰い、飲んだ。村の中央にある、ほぼ円形をした広場に案内された。広場のまわりは竹むらで囲われたようになっていた。ほぼ中央に神の木、神の石椅子と神の足跡がついたという石があった。木は高さ 2m ほどのところから二股に分かれ、その分かれ目のところに生贄の骨（水牛の顎と見られる。）が置いてあった。神木の下で村長から村の様子を聞いた。

「村は 56 世帯、276 人が住んでいる。通い婚の風習が残っている。700 年前にこの地に移住して来たと伝えられている。無文字社会であるため歌の伝承が難しい。稲作、サトウキビ、蔬菜などを主体とする農業を生業としている。今は焼畑はやっていないが、近くの彝（イ）族はやっている。余剰作物は市場に出す。近辺のタイ族は 3 つの支系（ダイ・カー、ダイ・ヤー、ダイ・サー）に分けられ、44 村で人口 7,000 人ほどである。我々は、ダイ・カーと呼ばれる。以前は支系間で通婚することはなかったが、今は、通婚している。仏教は信仰しない。精霊崇拜（アニミズム）のみである。儀礼に関しては、葬式は村長が取り仕切るが、他の行事は 6 人の女性を取り仕切る。子供のための学校が村にあったが、今は廃校になった（白壁 3 階建の立派な建物が残っていた。）。子供は 5km ほど離れた別の村にある学校に寄宿している。刺繍は子供の時からできるようにしている。川（紅河）には 80 種類の魚がいたが、上流の砂糖工場による汚染のためか、人口が増えたためか、今は 30 種類に減っている。」

- ②雲南タイ族には 8 世紀以降上座部仏教が伝えられ、その 80% が帰依したと言われている。祝祭日は全て仏教に関連していると言われているが、そのほとんどに水が関連している。仏教が既存の土俗を取り入れ村々に伝播した

と言われている。撥水節（ポースイチエ、水掛祭り）（タイ暦新年：太陽暦の4月上旬）では、男女が盛装して寺に参る。仏像に水を掛け、洗塵する。人々も互いに水を掛けあう。雲南タイ族は歴史的にその中心は大理以西や西双版纳（シブソンパンナ）等の旧モンマウ地域にある⁴⁾（第1章）。紅河流域のタイ族はその辺境にあたり、タイ族のより原型に近いものが残っていると言われている⁴⁾（第2章）。村長が近くの神の山に案内してくれた。頂上に近い広く平らな場所に、相当年数を経た神木が鬱蒼と鎮座していた。村人の家ごとの神木もあったという。そこで、タイ暦6月23日（太陽暦の10月上旬）に神を祭る儀式が行われる。4本柱の簡単な仮屋が設営してあった。この、神の山の中腹付近では野生稲というものも見せられた。紅河を見渡せる小高い場所にも案内された。ここでは、川の神を祭る儀式が行われる。川は紅い色をしており、雨期明けの濁流といえる様相を呈していた。神は山に棲み木に宿るといこと、水を崇める点は他のタイ族と同じで、その習俗は農耕（稲作・畑作）、漁労に関連していると思われる。

- ③村の家は土掌房だが、土壁の家は少なかった。宿泊した家は2階建コンクリート作りで門から入ったところが長方形で広がっていた。1階の小さな部屋の裸電球の下でおばあさんが眼鏡をかけ、刺繍を繕う夜なべ仕事をしていた。覗くと、眼鏡の奥の眼がにっこり笑った。
- ④村は緩やかな斜面にあり落ち着いた佇まいを見せていた。村の周囲に小規模な水田、畑があった。アヒルが水田に何羽も横に並んでいるのが見えた。大きな養魚池があった。自然の景観は損なわれることなく保たれていた。村人はコンポストを設置して廃棄物によりバイオガスを発生させ、燃料として用いている。
- ⑤広場の端に設置された「文化伝習館」（ミニミュージアム）に古い織機や生活用具、農具（犁等）、魚を捕える道具などが保存展示されていた。その中に、船の形をした木製函（長さ1.5m、深さ0.5m、上部幅0.5m・下部幅0.3m）があった。用途を聞くと、脱穀用とのことだった。

た。木槌を振り下ろす仕草もして見せてくれた。山形県鶴岡市所在の致道博物館に所蔵されている木製の「根船」（ねぶね）とほとんど同じ形の物だった。根船は蕨の根をつぶして入れ、水を張り、澱粉を沈殿させるために用いられたもので、水晒しによるアク抜きを行うための道具である。私は、「文化伝習館」の木製函は水晒しに用いたこともあるのではないかと思った^{5,6)}。尹紹亭教授によると、「3～9月に蕨をとり、根から澱粉を採る。その際、水晒しを行う。タイ族、苗（ミャオ）族は行っている。」とのことだった。

苗（ミャオ）族の村

- ①11月6日、紅河州個旧市かーふあんつとん卡房鎮路藤村・苗（ミャオ）族の村に入った。標高2,000mの山上にある。錫鉱山の鉱石積み出し用の重車両による使用のため激しく凸凹となった未舗装の悪路を行き、尾根筋の隘路を通して、21時過ぎに村に着いた。早速、夕食をとった。盛装した苗族の若い女性が席の中を廻り、白酒（バイチュウ）を汲んだコップを2つずつ⁷⁾（p66）持って我々に勧めてくれた。翌日、早朝8時から、村で葬儀が行われた。苗族の葬儀は盛大でお金がかかると言われている。今回は、5年前に亡くなった男性の本葬儀だった。5年前はお金が無く冷葬儀（仮葬儀）で済ませたという。親族は前日に鶏と線香を持って山へ参り、亡き人の魂を霊盆に載せて連れてくる。魂を家の中の土間の真ん中に置き、親戚一同で夜を通して魂の周りを歌って踊る。本葬儀は村の広場で行われる。広場周辺の村一帯の自然景観はよく保たれていた。本葬儀の朝、芦笙（ろしょう）を吹き、爆竹を鳴らしながら、家から親族一同が1列に、1人が霊盆を捧げて出てきた。既に盛装した親戚の女性や村人が広場に集まっている。広場の真ん中に葬祭用の仮屋が設けられていた。仮屋の中の地べたに霊盆を置いて、皆が線香を供える。盛装した女性全員が集まり、皆泣いた。悲しみがこみ上げてくるような泣き方だった。盛装した女性30人ほど、男性15人ほどが仮屋の祭壇の回りを大きく廻る。男性が9



写真1 花腰タイ族の盛装した女性達



写真2 脱穀用木製函（花腰タイ族村の文化伝習館）



写真3 苗族の葬儀。故人の祭壇の前で大きな声で泣く。



写真4 彝族の新築祝い。人びとが踊っている。

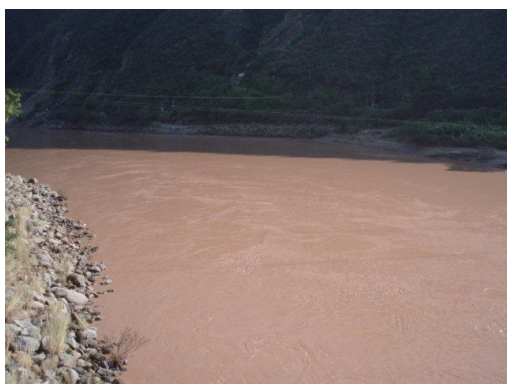


写真5 紅河の流れ。



写真6 壮族の村。赤レンガの壁、落ち着いた佇まい。

回、女性が7回廻る。その中に鼻先を縄で括られた牛が入り、皆と1緒にまわる。広場の周りに村人、老若男女が5～10人のかたまりになって、葬儀を見守る。犬がその周りをそわそわと歩きまわっている。ご馳走にありつけそうかなと期待しているような目をしていた。牛が生贄となり、葬儀の主要な部分が終わった。これから、牛を解体し、料理して村人皆に供する。1日かかるという。大きな鍋で夥しい量の薪が広場の傍らに準備されていた。

- ②葬儀に参列した女性の盛装は豪華絢爛たるものだった。着物の胸や腰、脚にあたる部分に施された刺繍の基本色は朱色で、牛を皇帝に献上した時に貰った判子の色と言われる。緑で田園・森をかたどり、朱色や黄色で太陽・星をかたどり、全体で自然の景色を表すと言う。

蛤尼(ハニ)族の村

11月8日、紅河州元陽県梯田鎮の蛤尼族の村に入り、梯田(棚田)(標高1,200～1,600m)を見た。既に刈り入れは終わり、水田となっていた。午後から夕方にかけて梯田にかかる陽が移ろい、雄大で幻想的な景観が広がった。焼畑だったところを水田にしたものと言われている。移動の途中で、彝(イ)族の家の新築祝いに出くわし、見学した。16人の女性が民族衣装を着て、祝いの踊りを踊っていた。新築の家は3階建てで、20人家族と言う。家主の主婦から、もち米のケーキを振る舞われた。

11月9日、蛤尼族の村を2箇所訪問し、染色用の藍甕、織機、棚田畦の修復、道路の修繕、棚田へ行く木橋の架け替え修復工事などを見学した。村全体で自給自足を達成しているようだった。水牛を小さな棚田に入れて鋤き返しを行っていた。普通は困難と言われている。

彝(イ)族の村

11月10日、文山州丘北県仙人洞村(民族文化生態村)と同州同県白臉村(彝族の村)(標高1,400m)に入った。カルスト地形の中にある美しい湖の景観保存、民族舞蹈の継承や村を守る神の鎮座する広場の再建と神への儀礼の復活など、民

族のアイデンティティを守る方向への村人の注力が伺われた。仙人洞村では儀礼を行う広場を再建し、彝族の精神(強さ)を表す虎と8つの神像を石造彫刻で形象化して配置していた。石像は近年作られたもので、芸術家の参加により、村人の伝承を聞いて像として形作られたと聞いた。水の神(池の中に置かれていた)、牛の神、火の神、道(耕作)の神、空の神(太陽と月)、土(田)の神、疫病の神、虫の神で、農耕・漁労に関係していると考えられる。虎は皮が土(田)、油は雨、血は川、骨は山を表しているとされている。1日置いた11月12日、広場の奥にある登り口から神の山へ登った。山上から眼下に広々とした湖と、湖の中から筍のように突出している小さな島々が見えた。彝族は漢化の進んだ民族と言われているが、訪れた村では山の神、水の神を崇拝する習俗が守られていた。

壮(チワン)族の村

11月11日、文山州丘北県錦屏鎮碧松鶯村・壮(チワン)族の村(標高1,480m)を訪ねた。村中で歓迎してくれた。男性の横笛、月琴や胡弓による演奏に合わせ、着飾った女性が歓迎の踊りを踊ってくれた。村の四合院風の立派な家に案内された。土間で餅つきを見せてくれた。木の臼と堅型の杵を用い2人で交互に搗く。リズムカルで踊りのように見えた。餅は箆にとって胡麻をまぶし、食べさせてくれた。美味しかった。昼食は家の居間と前庭一杯の宴で大勢の村人と共に、10種類以上の料理と白酒を振る舞われた。女性が次々に来て歓迎の歌を歌いながら2つずつ持った茶碗の白酒を勧める。断われない。断っても茶碗を下げない。バケツに並々と注がれた白酒がすっかり無くなるまで続いた。

文化多様性条約(2005年制定)について

文化相対主義は、1930年代、コロンビア大学の文化人類学者フランツ・ボアズによって提唱され、ルース・ベネディクトらに継承された。文化の多様性を人類が達成した成果として積極的に認めたものであることは良く知られている。ベネディクトは文化の多様性について、「人間のイマジネーションの豊かさについては触れないとしても、人生の道程と環境の力は、信じられない

ほどさまざまなコースの可能性を用意していて、そのいずれもが人間の生存して行く社会の役に立っているように思われる。」と述べている^{9,10)}。

一方、ユネスコが1946年設立以来、世界共通遺産としての文化の保全と促進に従事してきたことは、識者の間では夙に知られている。1959年、エジプト政府のアスワン・ハイ (Aswan High) ダムの建設計画に対し、ヌビア帯の土地の水没と共に、アブ・シンベル神殿 (Abu Simbel Temples) も水中に消えてしまうことが判明した。ユネスコがこの救済キャンペーンを行ったことは、一般に良く知られている。その後、この活動はモヘンジョダロの廃墟 (Archaeological Ruins at Mohenjodaro, Pakistan)、ボロブドール寺院 (Borobudur Temples Compound, Indonesia) の保存などに受継がれてきた。

ユネスコはこれらの動きを踏まえ、1972年、世界遺産条約制定を機に、財産権 (property) を中心とした保護活動から遺産 (heritage) という概念のもとに、文化遺産、自然遺産、複合遺産、危機遺産の保護制度を整備・充実させて行くことになった。

2003年には、消滅するおそれのある文化財 (伝統的な文化及び民間伝承) の保護を目的として、無形遺産条約が制定された。このことは、ユネスコが1980年代から人権や多文化主義の擁護、少数民族、先住民族、移民などに対する差別や排除などの問題に積極的に取り組んだ成果であると考えられる。1990年代から急速にグローバル化した世界状況 (強力な市場原理に裏打ちされた現象) の下で、新しい不平等 (格差) が台頭し、文化の多元性を否定し、文化間の軋轢が強められたと言われている。

ユネスコではこれに抗するように、2001年11月、『文化多様性は、人類共通の遺産と看做されるべきものであり、自然にとって生物多様性が必須であると同様に、人類にとって不可欠なものである。文化多様性—それは生きている宝物であり、不変のものではなく、変化、再生するものであるが、人類の生存を保障するプロセスでもある—を確保することを目的とし、他方で、文化の違いに由来する他文化に対する差別や文化的な原理主義を阻止することを目的とする、「文化の多様性に関する世界宣言」の採択がなされた。』

この世界宣言を受けた形で文化多様性条約 (Convention on the Protection and Promotion of the Diversity of Culutural Expressions) が2005年に第33回ユネスコ総会で制定された。正文はアラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語、及びスペイン語とされている³⁾。

この条約の運用は今後待つことになるが、ボアズ以来の文化相対主義の流れは、ここに1つの選択されうる枠組みを持つことになったと考えられる。

むすび

今回の訪問に関連して、雲南の農耕に携わる少数民族が今後も自然と調和して、平和な棲み分けを維持し、文化の伝統の継承と創造的な発展を推進して行くことは、人類の多様な文化の発展にとって意義のあることであると考えられる。同時に、今後、雲南の農耕に携わる少数民族の理解を深めることによって、私共日本民族 (大和民族やアイヌ民族) に対する私共自身の理解が更に進むのではないかと期待している。

謝辞

今回の訪問では、雲南大学民族研究院の尹紹亭教授を始めスタッフの皆様にも全面的なご協力をいただいた。ここに、心から感謝申し上げたい。

(かみやま たかし、旭化成 (株) 社友)

注

- 1) 雲南懇話会: HP 参照 <http://www.yunnan-k.jp/>
- 2) 民族文化生態村 (Ethnic Cultural and Ecological Villages): 尹紹亭教授を中心とする雲南大学、雲南工業大学、及び雲南民族博物館等のグループによる運動により形成されつつある、雲南少数民族の文化の保存と促進を目的として選定された村を言う。その目的は、急速な経済発展を伴う変化の中で、雲南の少数民族が内発的にその生活環境と文化を守り育てることにある。1999年、京都大学東南アジア研究センター教授 山田勇 (当時) はこのプロジェクトを調査し、「民族文化生態村」について「アジア・アフリカ生態資源紀行 (2000年) 岩波書店」の中 (p203 ~ p217) で報告している¹⁾。

参考文献

- 1) 尹紹亭編（2002 年）「民族文化生態村—雲南
試点報告」雲南民族出版社
- 2) 雲南大学文化産業研究所制作（2005 年）「新
平（1980 - 2005）中国花腰タイ之郷」雲南
大学出版社
- 3) 佐藤禎一著（2008 年）「文化と国際法—世界
遺産条約・無形遺産条約と文化多様性条約」
玉川大学出版部
- 4) 古島琴子著（2001 年）「雲南タイ族の世界—
バンジイホアの咲くところ」創土社
- 5) 佐々木高明著（1982 年）「照葉樹林文化の道
—ブータン、雲南から日本へ」日本出版放送
協会
- 6) 宮本常一著（2005 年）「日本文化の形成」（講
談社学術文庫）講談社
- 7) 大石惇・森誠編著（2002 年）「中国少数民族
農と食の知恵」明石書店
- 8) 王 柯著（2005 年）「多民族国家中国」（岩
波新書）岩波書店
- 9) 綾部恒雄編（1984 年）「文化人類学 15 の理論」
（中公新書）中央公論新社
- 10) ルース・ベネディクト著（1934 年）「文化の型」
（Patterns of Culture）（米山俊直訳）（講談社学
術文庫）講談社

Summary

Visiting the Minorities Villages Located on the Southern Part of Yunnan, China

Takashi Kamiyama

Yunnan Forum

From November 2 to November 15, 2008, in two weeks, we visited the minorities villages located in the southern part of Yunnan (the south side of Kunming · the capital city of Yunnan State, Honghe Autonomous Prefecture · Wonshang Autonomous Prefecture and those environs).

I observed the ecology of the minorities villages, taking each social neighborhood share and living peacefully, among many kinds of minorities, on the river side of the Honghe River, flowing from Dali to Hanoi in Vietnam through Hekou, and its tributaries, and in the Ailao Mountains, ranging along the Honghe River, on the slopes of its mountains, flats, basins, valleys and ravines.

I discussed and deduced the implications on their unique creation of culture, their balanced living plan toward natural environs, and their coping attitude with environmental problem through the observation of their ecology of living.

On the another point, relating to these visits, I would like to inform the elementary implications on the movement against the tendencies to the worldwide globalization (movement toward the market oriented economy) in recent years for the protection and the promotion of diversity of cultural expressions belonging to minorities and indigenous peoples on Convention on the Protection and Promotion of the Diversity of Cultural Expressions, UNESCO (enacted in 2005).